

整理番号	1	-	1	-	1	-	3	-	1	1
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

## 平成19年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」申請書（様式）

申請区分	1 単独 2 共同	設置形態	1 国立 2 公立 3 私立
大学・短期大学・ 高等専門学校名	駿河台大学		

申請〒-7番号	1	取組期間	平成19年度～21年度
取組名称 〔全角20 字以内〕	「駿大の森」百年協定に基づく飯能活性化		
	副題（サブタイトル） 「森林文化都市」構築支援プロジェクト		
取組学部等	全学		
キーワード 〔重要度の 高い順に 5つ以内〕	「駿大の森」、「駿大の里山」、飯能市・市民・企業との産官学連携、 中・高・大連携、新設科目「森林文化」		

取組の概要
<p>本学が位置する飯能市は、面積の70%以上を森林が占めており、飯能市はこの地域特性を活かして「森林文化都市」宣言を行い、環境省による「エコ・ツーリズムモデル地区」にも選定された。本プロジェクトは、こうした飯能市の地域活性化活動に対し、飯能市から無償で貸与された「駿大の森」における森林育成・保全活動及びキャンパスの約50%を占める「駿大の里山」における里山づくりを、飯能市・市民・企業との産官学連携、更には地域の中学校・高校との中・高・大連携を図りつつ実践するものである。その中心となるのが市民・中学生・高校生に履修の門戸を開く新設科目「森林文化」であり、「駿大の森」「駿大の里山」における森林の育成・保全・活用の体験学習、更に森の暮らしと文化、「西川材」の利用と経済可能性、地域観光のあり方、森林環境と法などについても学習し、森林を通じた飯能市の地域活性化を実現する基盤を構築するプロジェクトである。</p> <p>(取組の概要文字数：400字)  (取組実施対象地域：飯能市)  (地域再生計画との連動の有無) 有 ・ 無</p>

## 1 取組について

### (1) 取組の趣旨・目的

#### ①「学生参加による入間活性化プロジェクト」で得たものを地元飯能市で

本学は平成16年度に「学生参加による<入間>活性化プロジェクト」(通称:いるプロ)が現代GPに採択され、学生たちが、入間市の商店街における祭り・イベントなどの行事の企画・運営、小・中学校や市民に対するパソコン指導、子供ボランティア、通学合宿サポート、更に企業における商品開発に関する提案やモニターなどを積極的に展開し、入間市民や行政・地域企業などからも学生の活動に高い評価を受けている。このようなアウトキャンパス・スタディによって、学生は現実の行事を実現する際の企画力、情報収集力、プレゼンテーション能力、広報の手法、運営力、そして何よりもコミュニケーション力と実践的問題解決力を身に付けた。このような入間活性化活動に対して、本学の地元である飯能市においても大学及び学生による地域貢献の要望が、飯能市・市民はもとより大学内部においても発せられ、そうした声に応える形で、本学創立20周年記念事業の一つとして「森林環境プロジェクト」の取組が開始された。多くの学生が住む飯能市では、入間市以上に学生の参加が可能になり、「いるプロ」で明らかになったアウトキャンパス・スタディの教育的効果は更に大きくなると期待される。また、森林に基づく自然環境、文化歴史的背景及び経済的特質は、入間市とは異なったアウトキャンパス・スタディの可能性を与えることが出来る。

#### ②飯能市の地域特性と「森林文化都市宣言」

飯能市は面積の70%以上を森林が占めるといふ自然地理的特性と森林地域に生活し、西川材の供給地であるという文化的・歴史的・経済的特性を持っている。こうした地域特性に基づいて飯能市は、平成17年4月に「森林文化都市宣言」を行った。また、環境省による「エコ・ツーリズムモデル地区」に選定され、森林地域の歴史と文化、森林環境保全を通じた地域活性化を目指してその活動を開始したところである。しかし、現在は様々なアイデアが試論的に提案され遂行されている段階であり、行政・地域住民の活動が有機的な結びつきを形成しているとはいえず、「森林文化都市宣言」を具体化させることはこれからの飯能市及び市民に託された課題となっている状況である。こうした地元飯能市の地域活性化活動の現状に対し、「森林文化都市」の概念を明らかにし、森林地域の文化的・自然的・経済的な将来的展望を模索することは、まさに大学が位置する飯能市に貢献し、大学の地域における社会的責任を果たすことに他ならない。

#### ③本学の教育目標と学生に対する教育的意味

大学教育に対し、現実的な問題発見と解決、具体的な活動を通じた知識形成の必要性が叫ばれている。本学もこうした指摘に対応しようと、アウトキャンパス・スタディを重要な教育的活動として位置づけている。しかし、森林の育成・保全活動というアウトキャンパス・スタディは、これを地域の文化・歴史的条件の中で捉え、経済的視点から見ることなしには、単なる間伐・植林体験にとどまる危険性があり、森林文化の構築は不可能である。「いるプロ」は商店街を中心にしてきたが、本取組では更に文化・歴史的そして経

済的背景を基盤にした地域のありかた、つまり森林と人間との長い関わりの中から森林を捉える学問を実現しようとする目的を有している。**持続的な森林維持・保全活動**は言うに及ばず、地域活性化を実現する活動には、こうした総合的かつ多様な視点から地域を捉えることが不可欠である。更に、これらの内容を行政、地域住民、地域の中学・高校生との協働を通して実現することにより、異なる年齢や体力、異なる価値観や人生観を持つ人たちとのコミュニケーションを円滑に進める能力を培うことができる。自然環境的多様性に加えて、社会・対人的多様性を理解しつつ協働を遂行することは、人間の多様性を認め、一人ひとりが生きやすい社会、個性を尊重しつつ社会的目標を実現するための大切な**基礎的能力**を育成するということにもつながる。したがって、本学の教育目標である「**地域の中核を担う人材の育成**」を実現することはもとより、多様性を認める社会の実現という今日的課題にも現実的に答える実践力を培うことが可能となる。更に森林問題へのコミットは、地球温暖化の解決が可及的速やかに解決すべきグローバルな課題であり、環境問題への学生のアプローチも可能となる。

## **(2) 取組の実施体制等 (具体的な実施能力)**

### **・取組への参加予定人数( 教員 15名、職員 5名、学生 150名)**

#### **①100年に亘る「駿大の森」の育成**

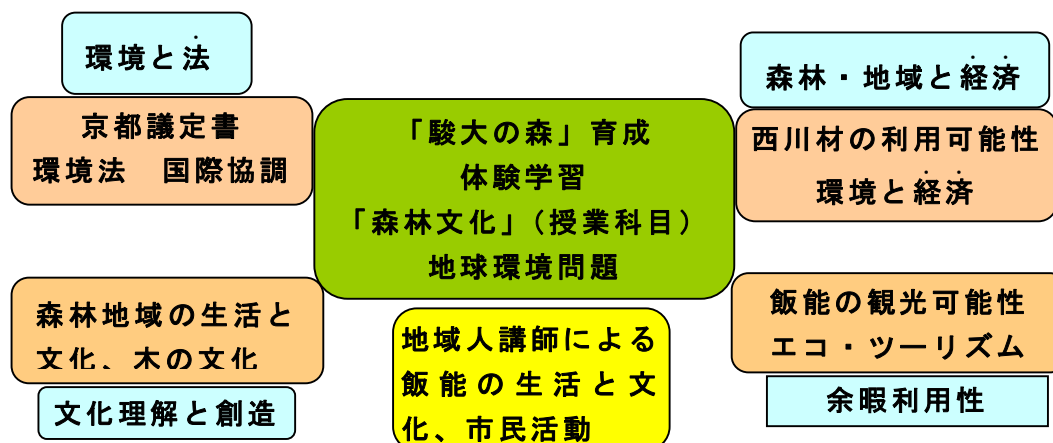
このプロジェクトの一部は「森林環境プロジェクト」として本学設立20周年記念事業に取り上げられ、全学的に取り組む課題として認知されている。そして、平成18年11月に飯能市との間で「**森林環境プロジェクトに関する協定**」を結び、合計2haほどの市有林を「**駿大の森**」として100年間に亘り無償貸与され、森林の育成・保全を実践するとともに、森林地域の暮らしと文化、経済や観光可能性などについて大学と市とが連携して学習・研究することとなった。平成18年12月には、学生約50名が「駿大の森」において、約1,100本の広葉樹の苗木を地元聖望学園の中学生や高校生、更には地元住民・地域企業との協同研究団体である「**駿大地域フォーラム**」メンバーと共に植林し、「駿大の森」における産官学連携、中・高・大連携もスタートしたところである。

#### **②新設科目「森林文化」**

この「森林環境プロジェクト」を更に持続的な取組とすべく、平成19年度より「**森林文化**」(2単位)を**副専攻の全てのテーマに開講される科目**として卒業要件に算入する。

新設科目「森林文化」は、法学部・経済学部・文化情報学部・現代文化学部の全4学部の専任教員が担当して図1のような内容の講義を行い、森林育成体験学習を通して、それらの内容を生きた知識、具体的知識とし、多元的な視点からの問題発見と解決能力を身に付けるとともに、市民や中学・高校生との協働により、世代間コミュニケーション能力、集団問題解決能力が養成されるものと期待できる。平成20年度からは、地域に暮らす人や森林維持・保全活動を行っている市民団体、企業、行政から**地域人講師**を招聘し、「森林文化」の内容を充実させ、森林地域飯能の地域的特性を更に多元的に学習できる科目とする予定である。

図 1. 新設科目「森林文化」の講義概要図



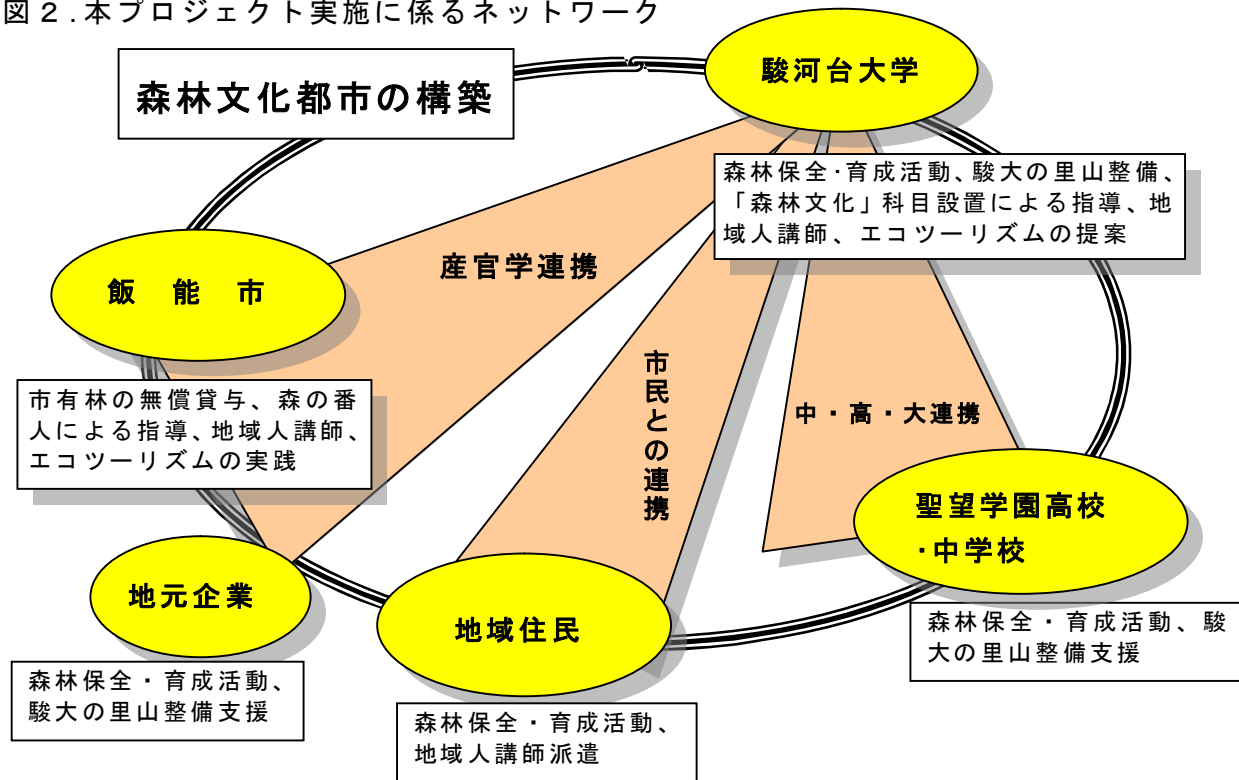
### ③「駿大の里山」計画

本取組では、本学キャンパスの約半分の面積を持つ森を「駿大の里山」と称し、生活圏の近くにある「癒しの森」として整備し、間伐材を利用した「癒しの道」を作成するとともに、ベンチなどの作成、きのこの栽培や炭焼き窯を作成しての炭焼き体験などの活動を学生と市民、子供たちと協働して実践していく。「駿大の里山」は本学キャンパス内にあり、キャンパスと隣接していることから、飯能市街地からのアクセスに便利であり、ボランティアな学生や市民の参加が期待できる。更に、「駿大の里山」を市民に開放し、山菜や栽培されたきのこ、炭を用いたイベントを大学祭などで開催することで、より多くの学生や市民、そして子供たちに里山の利用可能性、生活と森との有機的な関係のあり方などについて理解が深まり、活動の広がりが期待できる。

### ④産官学連携と中・高・大連携

本取組は、飯能市、市民による環境ボランティア団体、「駿大地域フォーラム」の企業家や市民と協働して活動を展開する。また、「駿大の森」は地元の聖望学園中学・高等学校と協働してその育成・保全に当たる。図2に示したような産官学連携、市民との連携、中・高・大連携の下に本プロジェクトを展開することで、飯能市における市民活動が活発化し、地域理解の学習が促進され、地域の学習力と活動力の向上に役立つものと考えている。更に、学生にとっては異なる年齢間で協働して活動を展開することにより、多様な年齢や多様な価値観や目的を持つ人との対話力の習得と集団的な問題解決能力が育成される。更に、このような地域における連携した活動は、飯能市の地域学習力と活動企画力、実践力を向上させることになり、森林地域の価値、豊かさを実感できることにつながり、誇りを持ってこの地に暮らすことに貢献できるものである。

図 2 . 本プロジェクト実施に係るネットワーク



### 実現に向けた組織体制

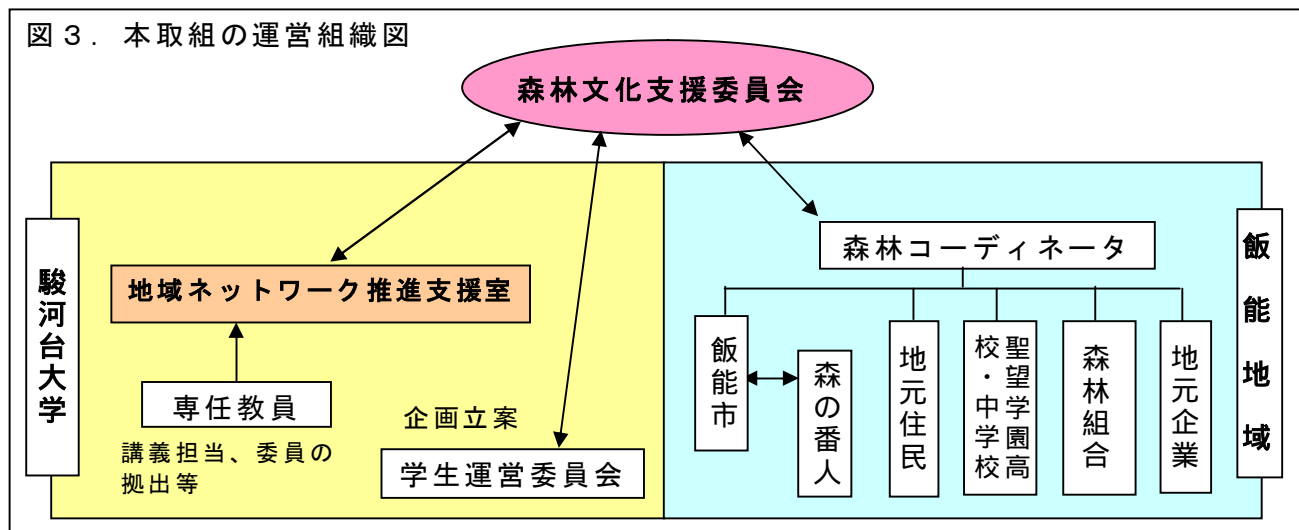
本取組を実現するための組織体制の概要は図 3 に示したとおりである。本学では、これまで飯能市の市有林における植林・間伐・枝打ち活動を、大学と地域住民及び企業家によって地域活性化を企図する「駿大地域フォーラム」や聖望学園との協働作業として実施してきた。本取組では、更に有機的な活動を展開するため、本学の「地域ネットワーク推進支援室」の下に、大学、行政、市民、中学・高等学校、森林組合、企業の各代表者による「森林文化支援委員会」を設置し、取組を企画・立案し実行する。また、産官学連携や中・高・大連携の連絡調整などを行う「森林コーディネータ」を置き、飯能市から派遣される「森の番人」と協力しつつ、安全かつ機動的で円滑な森林作業を実施する。更に学生組織として「学生運営委員会」を設立して、学生の視点から新たな活動の企画立案等も「森林文化支援委員会」に反映できる仕組みを作る。

### (3) 評価体制等

本取組に関する評価は、飯能市森林組合長、飯能市役所農林課長、飯能市役所商工課長、他大学教員、地域ネットワーク推進支援室長からなる「評価委員会」によって行う。この委員会では、①森林育成・保全作業、地域理解における目標達成度、②行政・市民・企業及び聖望学園高校・中学との協働や連携のあり方などについて評価する。学生には、授業アンケートを通して授業や森林活動に関する評価を行い、その結果は「森林文化支援委員会」の議題として反映され、取組の改善・改革の方策に生かす。各年度末の評価は学長に行い、取組期間が終了する平成 21 年度には、3 年間を総括した結果を学長に報

告するとともに、報告書を作成の上、関係各方面に配布する。

図3. 本取組の運営組織図



#### (4) 教育改革への有効性

##### ①取組における教育課程、教育方法などの創意工夫について

本取組は森林の保全・育成活動を中心的な内容とする「森林文化」という科目を文科系大学において卒業要件として設置したこと、更に、森林を環境という枠組みだけではなく地域理解、地域特性に基づいて学習する点に教育課程における工夫がある。

教育方法においては、アウトキャンパス・スタディとして学生の実体験を重視すること、更に、地域で生活して仕事をしている人や社会的活動に関心を持つ人等を地域人講師として地域学習を展開することは、従来の教育手法との有機的な結合を目指しており、今後の大学改革にとって有効性を持つものである。また、地域人講師によって地域理解を実現する本取組にとって、実社会をオンタイムで考える教育を大学が実践するモデルになると考える。

##### ②取組における実施体制などの創意工夫について

産官学連携と中・高・大連携を併せ持つ活動を展開することは、実施体制として工夫したことである。これまでの大学における地域貢献は、単独ゼミや単一学部の取組が中心で、ゼミや学部特性に依存した実践が多く、本取組で目指すような大学全体の総合的連携を実現することが少なかった。本取組において4学部からの専任教員が「森林文化」の科目を担当すること、「地域ネットワーク推進支援室」という全学組織のもとで組織的な活動を展開することなど、全学的取り組みができる体制が整っている。また、産官学民及び中・高・大と連携しながら活動を展開することにより、この取組過程自体が地域の人々の交流を活発にし、地域活性化に資するものである。更に、学生がこうした連携の中に「学生運営委員会」として加わることは、学生の自立力や社会的諸能力の獲得だけでなく、若者参加による地域の活性化を促進させるものである。

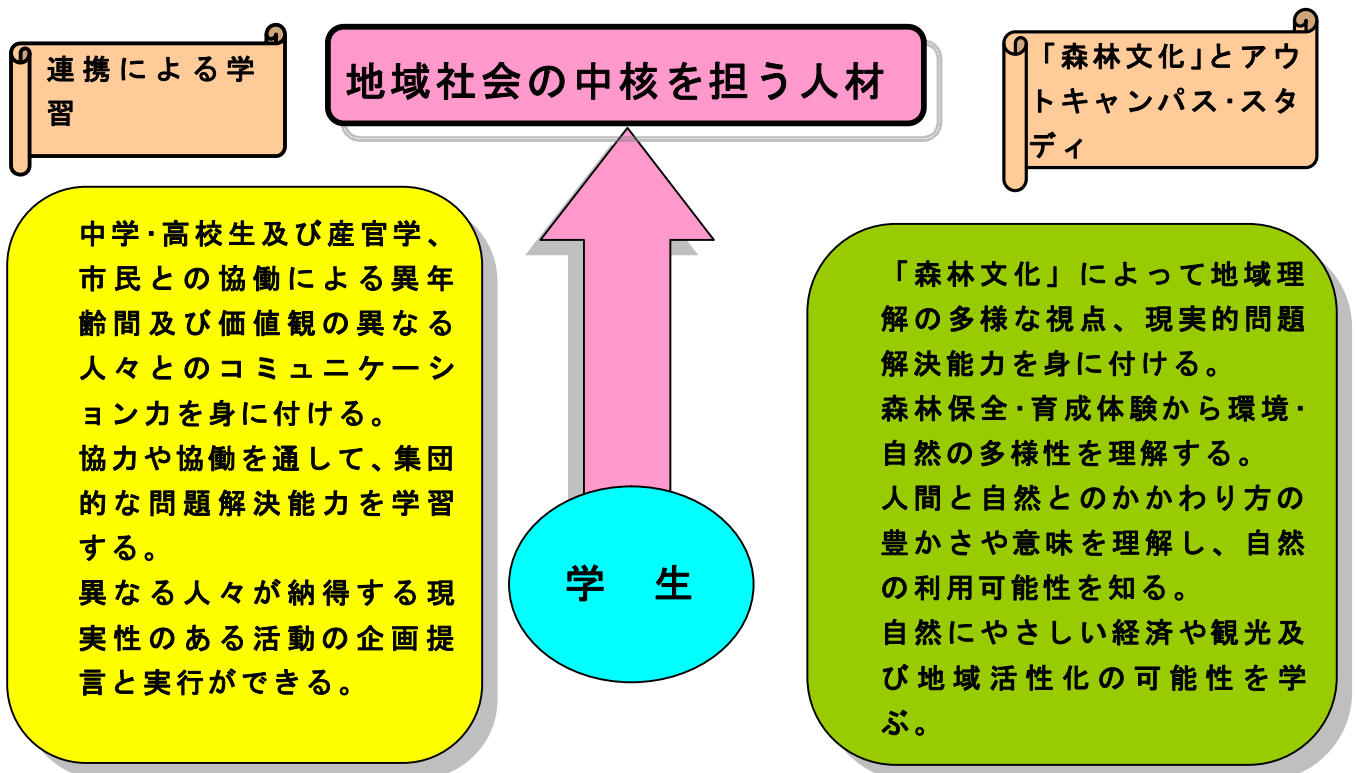
##### ③取組により期待できる成果等の教育改革への有効性について

本学が目指す地域社会の中核を形成する人材の育成にとって、本取組は地域の文化歴史的特徴、自然環境的特徴、経済活動的特徴などの多様な視点から森林・地域を捉える

とともに、産官学連携、中・高・大連携によって多種多様な意見や態度を持つ人々や団体との協働を実現する中で、現実的な問題発見及び問題解決能力や異なる立場の人たちとのコミュニケーション能力を実践的、具体的場面で涵養することができるという意味で、本学の教育改革を推進するための実際的な有用性を持つ取り組みである。

また、日本は森林国であるため、本学と類似した環境を持つ大学も多く、森林に対する環境的かつ社会的関心や問題意識も共有できる可能性が高い。しかし、日本の森林は各地の地域生活や歴史・文化のあり方と深く関わっており、多様な森林文化を形成してきたと考えられる。この地域の多様性、森林文化の多様性をしっかりと意識して地域に学び、地域を活かす取組を行うことにこそ、本取組の意義がある。本取組がこうした森林文化の多様性に基づいた地域貢献を実現するという意味で、大学の地域貢献について、ひとつのモデルを提供することができると考えている（図4参照）。

図4. 本学の教育目標と学生の学習内容との関連性





## 2 取組の実施計画等について

### (1) 本取組に関わるこれまでの実績

平成17年6月に「駿大地域フォーラム」有志が市有林の間伐・枝打ち作業を実施し、同年10月には学生15名も同じ作業を体験した。また、平成18年12月には学生50名が聖望学園教員、市民らと広葉樹の植林を行った。「駿大地域フォーラム」は平成18年9月に山形県金山町に市民ら18名で視察を行い、同年10月の駿輝祭（本学の学園祭の名称）で金山町住民を話題提供者としてシンポジウムを開催し、平成19年3月には哲学者内山節氏による「森を考える」講演会を開催した。

### (2) 取組の実施計画

本取組の全体像は図5に示したとおりである。



図5. 本取組の3年計画の全体像



### 平成19年度の実施計画

「森林文化」(2単位)を開講し全学部から講師を配置し、学部特性に応じた森林文化への関わり方を学生に提示する。また飯能市が10月に予定している「森林文化フェスティバル」にも参加・協力する。「駿大の森」では平成18年度に植林した広葉樹の苗木を育成する目的で下草刈りを行うとともに既存林での間伐・枝打ち・補植を行う。これらの作業は聖望学園中学・高校生、「駿大地域フォーラム」と協働して実施する。「駿大の里山」では整備計画を作成するための自然観察・地形観察を行い、整備計画を作成する。また、間伐材を利用したベンチなどの作品を作成する。きのこ栽培を実験的に行い、駿輝祭では作品作り体験や森の食材を使った料理を楽しむとともに、森林文化に関わるシンポジウムを市民に向けて開催する。また、林業地の地域視察を行い、森林文化のあり方の参考とする。

### 平成20年度の実施計画

授業の「森林文化」では地域の林業家、材木業や建築家、環境保護活動家などを地域人講師として招聘し、科目内容を充実させ4単位科目とする。「駿大の森」では引き続き苗木育成のために下草刈りを行うとともに間伐と枝打ちを行う。これらの作業は聖望学園中学・高校生、「駿大地域フォーラム」と協働して実施する。「駿大の里山」では整備計画に基づいて、間伐材を利用した「癒しの道」を作成するとともに、炭焼き窯を作成し、炭焼きにも挑戦し、森の利用可能性について学習する。間伐材を利用した小物やベンチなどの作品作りやきのこ栽培を本格的に開始する。キャンパス内に作業場も設置し、いつでも活動が行える拠点作りを行うとともに、駿輝祭では森林文化に関わるシンポジウムを市民に向けて開催する。また、林業地の地域視察を行い、森林文化のあり方の参考とする。

更に、飯能市主催の「生涯学習フェスティバル」等に参加し、活動の広がりや市民との協働を訴える場とする。

### 平成21年度の実施計画

授業の「森林文化」では前年度講師陣に加えて、エコ・ツーリズムの企画・実行者、郷土史研究者、生活者などを地域人講師として招聘し、地域観光や生活の側面にも関心を広げる。聖望学園中学・高校生、「駿大地域フォーラム」と連携して、「駿大の森」では引き続き苗木育成のために下草刈りを行うとともに間伐と枝打ちを行う。「駿大の里山」では前年度より開始した「癒しの森」を完成させるとともに、炭焼きや山菜取り、きのこ栽培も年中行事として実施する。間伐材を利用したログハウス作りにも挑戦する。駿輝祭では3年間の活動報告と成果報告を行い、更に森林文化の将来性に関わるシンポジウムも開催する。これらの活動のまとめとして、学生、教職員、行政、市民、聖望学園中学生・高校生らによって活動報告集を作成し、関係する諸機関に配布する。